

「三月のコツペパン」

後藤順

喫茶店でわずかな一人を楽しむ
見知らぬ街に降りた旅の途中の
大人の僕は異邦人を決め込む
窓際の席から眺める
行き交う人は足早だ

真新しいランドセルを背負った子が
作業着の男と僕の隣りに座った
来月は入学式だという
新鮮な牛皮のにおいが
空っぽな僕の記憶を蘇えさせる

オヤジがこぐ自転車の荷台に
少年の僕はしがみつく
お寺に饅頭を納品した帰り
市川駅前にあった山崎製パン所の店で
僕だけが買ってくれたコツペパン

ほんのりマーガリンのにおいがして
明日のゆたかさを少し感じた
二階にあったレストランには
オヤジが今度の今度と笑ったが
ときが小さな約束を流した

ハムとキャベツを挟んだコツペパンを
少年が口いっぱい
時間を気にしながら
男が見つめては微笑む姿に
なにか僕は忘れ物をしてきたようだ

脳卒中で倒れた父はこわかった
苛立ちが父を変えた
介護する母をなぐる鬼がいた

生きる尊厳など

真っ黒に変色するのははやい

変わったのは僕なのか

ちらっと少年の瞳が僕を見る

ランドセルとコッペパンのにおいに

やさしい父がやってくる

恨みも憎しみも光の中へ

ときが僕の心を濁らせたのか

ふたりは手をつなぎ

三月の町へと歩き出す

父の七回忌には家に帰ろう

新しい時刻表をゆっくりめくる